九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

中国における無形文化遺産の研究 : 河北農村の民間信仰「捉黄鬼」を事例として

白, 松強

https://hdl.handle.net/2324/1500483

出版情報：九州大学, 2014, 博士（人間環境学）, 課程博士
バージョン：
権利関係：やむを得ない事由により本文ファイル非公開（3）

氏　　名	白　松強
論　文　名	中国における無形文化遺産の研究 ー河北農村の民間信仰「捉黄鬼」を事例としてー
論文調査委員	主　査　　九州大学　教授　　関　一敏 副　査　　九州大学　准教授　飯嶋秀治 副　査　　九州大学　准教授　長谷千代子

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は、現代中国農村における民俗行事の無形（非物質）文化遺産登録をめぐるポリティクスに焦点をあわせ、伝統文化が国家の文化表象として選別され資源化されるプロセスと、それを可能にするムラから国家のレベルにいたる諸々の関係主体の動きを精緻に復元しようとする論考である。まず、戦後から 2004 年のユネスコ世界遺産条約締結とその後の活発な遺産登録運動にいたる国家的文化政策の推移を背景に、民間信仰の社会史が抑圧・停滞・復興の三期を経てきたことを述べ（第一章）、ついで調査対象である河北省武安市固義村の民俗世界を史的かつ構造的に描いたうえで（第二章）、「捉黄鬼」とよばれる旧正月 14・15 日の追儺行事（鬼やらい）の民族誌的記述をふまえて、そこにうかがわれる諸々の社会レベルの政治力学を実証的にあとづけている（第三章）。すなわち、村民・村祭保存会・村委員会・地元政府・中央政府といった諸関係主体間の文化遺産化をめぐる葛藤と和合のせめぎあいをその多様性と複雑性においてとらえ、最後に遺産登録をはじめとする文化財行政によって伝統的民俗行事が変容をうながされる局面（観光的イベント化、ナショナルブランド化）を析出するにいたる（第四章）。フィールドワークと歴史記述を足場にした、文化ナショナリズム研究のこころみであり、国家の文化表象の生成過程そのものの現在的な分析において新たな学問的知見を提起しえたものということができる。よって本論文は博士（人間環境学）の学位に価するものと認める。